

「言語修得道場」で育む
～言語活動の充実を目指して～

伊丹市立荒牧中学校

校長 難波 重之

教諭 秋山 宏之

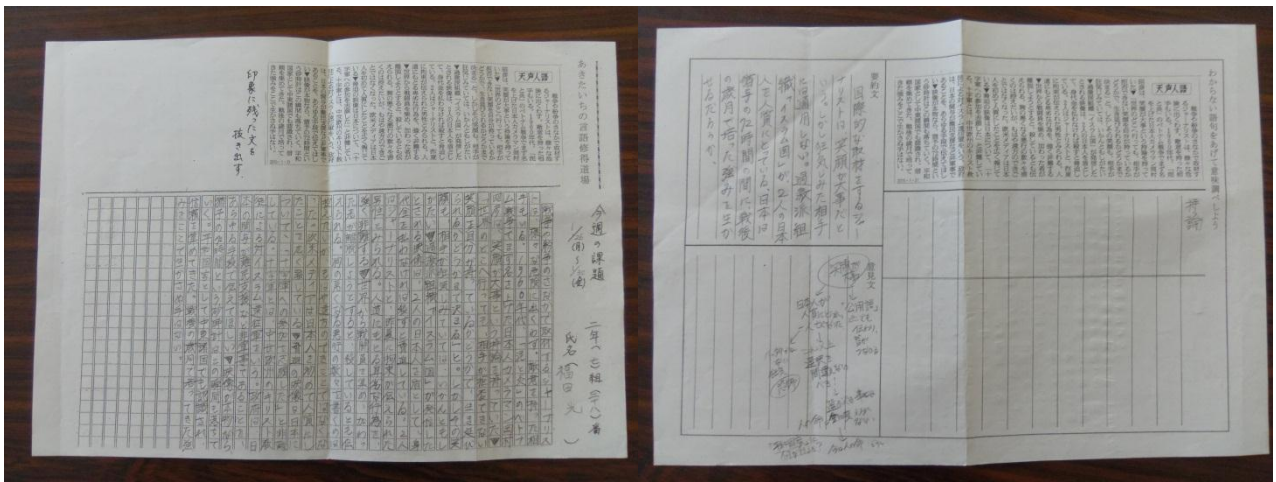
1. はじめに

本校では「意欲を持って学習に取り組ませる」ことが生徒指導上の課題を解決する手立てとなると考え、「授業が楽しい」と実感させる場づくりと、そのための教師の手立てに焦点を当てて授業研究に取り組んでいる。しかし、基本的な学習内容の定着が十分ではなく、特に自分の考えや思いをまとめたり、書いたりすることを苦手とする生徒が多い。そこで、中学2年生では、終礼の10分間を学習タイムに設定し、「書く」力を育てることに重点を置いた学習に取り組んだ。その1年間の成果を述べる。

2. 取り組み

(1) 「言語修得道場」について

- ①毎日の終礼学習の時間（月～金曜日 15：35～45）を「言語修得道場」に当てる。
- ②週初めの月曜日に朝日新聞の「天声人語」を用いたワークシートを使用する。
- ③金曜日にワークシートを回収して、各クラス担任が点検し、次の週の月曜日に返却する。（担任によってはコメントを記入して返却している）
- ④生徒の取り組み段階に合わせて、「書き写す」「分からない語句を調べる」「文を要約する」「意見文を書く」の4段階に設定し、1週間で「意見文を書く」ところまでを目標に取り組ませる。
- ⑥初め、「書き写す」「分からない語句を調べる」のところまでで終わってしまう生徒がほとんどであったが、回数を重ねていくと、多数の生徒が「意見文」を書くところまで1週間で仕上げられるようになった。



(2) 新聞を書く

2年生の生徒は、1年生の時に「林間学校新聞」をつくり、大きな行事の後には必ず新聞にまとめる活動を行ってきた。2年生になった今年は、トライやる・ウィークでの職場体験を新聞にまとめた。

体験を記事にすることは難しく、感想文になりがちなどところが多々あった。また、記事の割り振りやレイアウトにもこだわらせ、総合学習の時間を中心に10時間程度を使い、仕上げることができた。このときに、実際の新聞を使いながら、レイアウトの仕方や見出しについて参考にしながら新聞をまとめていった。



(3) 新聞記者派遣

3月5日に毎日新聞神戸支局の後藤豪記者に来ていただき、「修学旅行新聞の作り方」について話を伺った。「林間学校新聞」「トライやる・ウィーク新聞」と、単なる感想に終わっていた新聞づくりだったので、そうならない工夫について教えてもらった。「人」にスポットを当て、過去・現在・未来に分けて書くと、様になる—など、5月に行く修学旅行の新聞作りに役立つアドバイスをたくさん頂いた。



3. 成果と課題

(1) 成果

「言語修得道場」

①書くスピードが上がった。

また、書くことに関して抵抗感がなくなった。

②分からない語句がある場合は辞書で調べるので、語彙力が上がった。

③要約する力が身に付いた。(何回も文章を読むので、読むことに対しての抵抗もなくなった)

④時事的な内容の記事を取り上げるので、社会的な視野が広がり、世の中の動きに関心を持つ生徒が増えた。

⑤意見文を書くことによって、自分の思いや考えを表現できるようになった。

コミュニケーション能力が向上した。

「新聞作成」

①各社の新聞を参考にしながら、記事の書き方やレイアウトの仕方などを工夫しながら作成できた。

②新聞作成において、基本的なルールを確認しながら、割り付けし、囲み記事の書き方などを実際の新聞を見ながら作成できた。

「新聞記者派遣」

- ①記事の書き方やレイアウトの仕方について学ぶことができ、記事を書くときのポイントや、記事にしやすい内容など、苦手意識の強い生徒には非常に分かりやすく、取り組みやすい内容であった。
- ②取材の仕方を学んだので、3年生の「修学旅行新聞」では、現地で取材したことを基に記事を作成する。

(2) 課題

書くことに関しては、抵抗が徐々になくなってはきたが、自分の思いや考えを表現することに関してはまだまだ苦手とする生徒が多く、コミュニケーション能力を高めていく必要がある。また、日々の授業でも新聞活用場面を増やし、社会に目を向け、興味を持たせる。新聞を購読している家庭が少ない本校では、教師が意図的に活用する場面を増やしていかなければならないだろう。